

八丁味噌事始め

豆味噌は古くから東海地方で造られていた。桶狭間から落ちのびた今川義元の家臣が岡崎の寺で味噌造りを学んだ。その子孫が岡崎城より西へ八丁(約870m)の距離にある旧八丁村(現八帖町)で味噌屋を創業したのが八丁味噌の起源。創業地では今なお伝統製法による味噌が造られている。



味噌蔵(岡崎市)



徳川將軍家・松平家の菩提寺。桶狭間の戦いに敗れ岡崎に逃げ帰った若き徳川家康(当時松平元康)は、大樹寺で自害を考えたが住職から「厭離穢土欣求浄土」と教え諭され思いとまいった。この言葉は家康

成道山大樹寺

岡崎市

歴代將軍の等身大の位牌を安置する



西三河エリアは、この家康の生まれ故郷であり、わしを支えてくれた三河武士のふるさとである。わが父祖たちがたどった松平郷・安城、岡崎には松平・徳川のパワースポットが目白押しじゃ。

西三河



いえやすくん



二〇二三年一月、全面リニューアル!

岡崎城

岡崎市

徳川家康が生誕した城。天守内部は館内の展示内容を一新。ストーリー性ある展示、臨場感あふれるAR体験、魅力満載の映像シアターなど何度も訪れたくなる城に生まれ変わった。天守以外にも家康産湯の井戸や石垣、大河ドラマ館(三河武士のやかた家康館)など見どころ多数。

新岡崎市康生町561
0564-222772



殿・随神門は国の重要文化財に指定されている。
新岡崎市伊賀町東郷中86
0564-262789



朱塗り極彩色の楼門に圧倒される

六所神社

岡崎市



少年時代の家康が学問にはげんだ寺
新岡崎市明大寺町耳取44
0564-512630



二村山法蔵寺

岡崎市

家康が幼少の頃、手習いや学問にはげんだ寺。硯箱、机などの遺品の



二〇二三年一月より大河ドラマ館に変身!

三河武士のやかた家康館

岡崎市

二〇二三年一月から翌年一月までは大河ドラマ館としてOPEN! 一階、地階のスペースに出演者の衣装や撮影小道具の展示のほか、映像コーナーが設けられ、大河ドラマ『どうする家康の世界に彩られている。隣接する岡崎城天守や市内の家康ゆかりの史跡めぐりなど家康観光の出発点としてよ。

新岡崎市康生町561
0564-2221222



他、境内には、六角堂開運勝利観音、東照権現宮、家康ゆかりの御草紙かけ松、おてならい井戸、お手植えの桜など文化財も現存する。山腹には新選組・近藤勇のもとと伝わる首塚もある。

新岡崎市本宿町寺山1
0564-482636



日光、久能山と並ぶ日本三大東照宮

滝山東照宮

岡崎市



三代將軍徳川家光により岡崎城の鬼門を守護する滝山寺の境内に創建された。日本三大東照宮のひとつ。本殿のほか、拜殿、幣殿など国の重要文化財に指定されている。社殿内部も拝観可能。滝山寺は、運慶、湛慶の聖観音、梵天、帝釈天三尊像を寺宝とする古刹。

新岡崎市滝町山籠1-17
0564-462516



徳川家康と三河武士の絆

文 小和田哲男
(静岡大学名誉教授)



▲「徳川十六将図」(大樹寺蔵/岡崎市):家康を中心に初期の武功派の家臣十六名を描く。酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政の四天王に加え、松平康忠・高木清秀・内藤正成・大久保忠世・大久保忠佐・服部正成・鳥居直忠・鳥居元忠・蜂屋貞次・平岩親吉・渡邊守綱・米津常春が描かれている。

「徳川十六将図」と

「徳川二十将図」

「徳川十六将図」および「徳川二十将図」という図が伝わっている。十六将図の場合には、家康を上部長真中にしてその下に十六人、二十将図の場合には、二十人が描か

れている。家康家臣「ベスト16」および「ベスト20」というわけで、そのどちらにも入っているのが、酒井忠次・榊原康政・本多忠勝・井伊直政のいわゆる「四天王」である。このうち、井伊直政を除く三人が三河出身の三河武士である。そのほか、鳥居元忠・本多正信、

平岩親吉・大久保忠世らも、いずれも三河譜代というわけで、家康家臣団の中心が三河武士だったことが明らかである。三河武士という点、「犬のような忠誠心」といった表現がある。大久保彦左衛門忠教の著わした『三河物語』に、「よくてもあしく

ても御家の犬」とあるのが出典と思われるが、三河武士といえど、「犬のような忠誠心をもった武士」の代名詞のようないわれ方をしており、そのことを実際に示したのが、元龜三年(一五七二)二月二十二日の三方ヶ原の戦いの際の、家康家臣たちの行動である。

家康の身代わりとなって

死んでいった家臣たち

家康が武田信玄と戦った三方ヶ原の戦いの際、家康は八〇〇〇いた家臣の割にあたる八〇〇〇人を失っているが、そのうちの何人かは、家康の身代わりとなって、「影武者」のような形で死んでいったといわれている。その一人が夏目吉信で、彼は高齢だったので、この日は浜松城で留守を預かっていたが、「家康様が負けて逃げてくるどころだ」という情報を耳にするや否や、自分の愛馬にまたがって三方ヶ原に迎えに出

たところ、うまい具合に家康とすれちがいで、そのとき、自分は馬を降りてその馬に家康を乗せて、浜松城にもどらせている。その代わり、夏目吉信はそこで武田の兵に首を取られていた。また、鈴木久三郎という家臣は、家康から采配を奪い、家康になり代わって敵中に留まって時間かせぎをして家康を逃がし、やはり、そこで首を取られている。こうした家臣たちの犠牲によって生きのびた家康は、以後、「家臣こそわが宝」といったいい方をするようになる。

敵対した者も赦す

家康の度量

もともと、家康と三河武士との絆はいつも強固だったわけではない。永禄六年(一五六三)から翌七年にかけての三河一向一揆のときには、家康の家臣でありながら、一揆側に属する者もあり、実際に戦っていた。その一人が本多正信であるが、のち、赦され、家康の腹心として帷幄に加わっていることは周知の通りである。また、家康は、武田信玄とともに今川氏を滅ぼしたときには今川氏の遺臣を、織田信長とともに武田氏を滅ぼしたときは武田氏の遺臣を、豊臣秀吉とともに北条氏を滅ぼしたときは北条氏の遺臣を自己の家臣団に取り込んで

最後に、家康の人材観を物語る言葉を紹介しておきたい。『徳川実紀』にみえるもので、「又人の善悪を察するに、や、もすれば己が好みにひかれ、わがよしと思ふ方をよしと見るものなり。人には其長所のあれば、己が心を捨て、たゞ人の長所をとれと仰られし事もあり」というものである。



▲三河武士のやかた家康館(岡崎市):家康の事績と三河武士の活躍をわかりやすく展示する資料館(※2023年1月21日から2024年1月8日までは大河ドラマ館として運営)



▲「長篠合戦図屏風」部分(浦野家旧蔵/豊田市郷土資料館蔵):家康を中心に三河武士たちの活躍が描かれている。



著者プロフィール

小和田 哲男(おわたてつお)
一九四四年静岡市生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、静岡大学名誉教授、文学博士、NHK大河ドラマでは二〇一四年「軍師官兵衛」(二〇一七年「おんな城主直虎」(二〇二〇年)「麒麟がくる」(二〇二三年)「つる」)など、家康各作品の時代考証を担当。著書に「戦国武将を育てた神僧たち」(軍師・参謀・戦国時代の演出家たち)など。